

障害児教育における新型コロナウイルス関連問題検討会報告書 概要版

全国障害者問題研究会鳥取支部

I 検討会の概要

●研究の概要

目的：コロナ感染拡大防止のための長期に渡る休校措置は家庭・子どもに甚大な被害をもたらし、学童保育、放課後等デイサービスにも深刻な負担を強いた。その実態はどうなっているのか。厳しい感染が及んでいない地域だからこそ、その調査を担う必要があるだろうと、全障研鳥取支部は全国の知己に呼びかけリモート研究会を3回開いた。その内容を報告するのが、本研究の目的である。

●研究主体

障害児教育における新型コロナウイルス関連問題検討会

主催：全国障害者問題研究会鳥取支部

検討会委員長：國本真吾（鳥取短期大学教員）

副委員長：澤田淳太郎（鳥取大学附属特別支援学校教員）

委員：奥村操子（鳥取県立特別支援学校教員）、齊藤里依（発達障害保護者の会主宰）、内藤綾子（鳥取市、心理士）、三木裕和（鳥取大学教員）

共催：鳥取大学地域学部地域学科三木研究室、鳥取短期大学幼児教育保育学科國本研究室

* 文部科学省学術研究助成基金助成金（基盤研究（C）（一般））「知的障害、発達障害の教育目標・教育評価に関する研究－資質・能力論の観点から」の一環として行った。

●研究経過

・第1回 日時：2020年6月14日（日） 10時30分～12時30分

・第2回 日時：2020年7月5日（日） 14:00-16:30

・第3回 日時：2020年8月30日（日） 13:30-16:30

会場：鳥取大学地域学部 5160 教室をセンターに、Zoom によるリモート開催。

II 第1回検討会

日時：2020年6月14日（日） 10時30分～12時30分

招待者：主に知的障害特別支援学校、特別支援学級の教員

塚田直也（神奈川県、大学附属特別支援学校学部主事、知的障害）、西堂直子（兵庫県、大学附属特別支援学校副校長、知的障害）、高橋翔吾（大阪府、公立小学校特別支援学級担任、知的障害）、越野和之（奈良教育大学教員）。全員リモート参加。

参加者：鳥取上記委員に加え、寺川志奈子（鳥取大学教員）、内地留学教員、県内特別支援学校教員、全障研会員。一部リモート参加。司会進行：國本。

2. 招待者の発言

●学校は突然の休校要請による混乱があり、大きな影響を受けた。

安倍首相による休校要請は突然であり、学校の影響は大きく、混乱があった。特に、卒業式、入学式などへの影響が見られた。学部ごとに簡略化、時間交代などの工夫をした。入学式のあと、長期休校に入った学校もある。

6月に入学式を行ったケースもある。

休校要請以前から、市中に感染の情報があり、安全のため欠席する児童生徒もあった。5月末まで欠席する児童もあった。

学校再開後も分散登校で授業を行った。午前午後、学年ごとなどの対応があった。保護者の送迎を求めた場合もある。過密を避けるため、登校場所を変える、スクールバス増車の検討、タクシー券配布など、細かな対応を求められた。一方、学校再開後、児童生徒が生き生きと来ている姿に教師が助けられた、との感想もあった。

給食もパンと牛乳とゼリーぐらいの簡単なものだった。給食スタッフ、スクールバス添乗員、警備員、作業員などの雇用継続に苦心した。大阪の場合、知事や市長が勝手にいろいろ言って、教育委員会も知らないうちにいろいろなことが決まった。教師へのマイナスの影響が見られた。

●学童保育など、福祉がたいへんだった

学校は休校だが、放課後児童クラブ（学童保育）、放課後等デイサービスは開けるよという厚生労働省の通知（2月27日）を受けて、児童生徒の受け止めが福祉事業所の負担となった。放課後児童クラブに学校の施設を開放し、事業所へ連絡した学校も見られた。一方で、デイサービスでは遊び場が限られ、市内の遊び場が使えず、子どもを連れて歩いていると罵声を浴びせられた。

●職員対立が生まれそうだった

学校施設の開放について、職員間で強い反対意見のある学校があった。（コロナが）出たらどうするんだと。分断をしないように、対話の工夫が求められていた。不安感から攻撃、対立が生まれた。子どもと保護者を中心にして、どう学校教育の意味を問い返すか。そのための条件を整えることに尽力した学校も見られた。

●子ども・家庭への影響はさまざま

3ヶ月の休みの間、外にも1回しか出ていない家庭があった。買い物も父が仕事帰りにしてくる。本人は学校どうなっているんだろうと思うようで、時々学校の服を出してくるということを聞いた。

休業になって、お父さんの勤務形態もテレワークになり、両親の受けとめによって、子どもにより変化が見られたケースもあった。DVDを送り、保護者や子どもたちの反応がよかったケースもあった。教師も勇気づけられた。

●小学校・中学校では「学習の遅れ」が問題になった

小学校、中学校は授業をどう進めるか、授業数が少なくなって困る、教科書が終わるのかという話を中心になっていた。通常の学級と交流している特別支援学級の子どものには通常級と同じプリントを出したケースもあった。

小学校の先生たちは授業を進める動画を作りたい感じだった。教育委員会もスタディサプリとか動画配信に積極的だった。好きな子はいいけど、勉強苦手な子はさっぱりなんじゃないかなという感想があった。課題ができないで困っているという声が多かった。学校がはじまったらいっしょにやるから大丈夫だと伝えた教員もある。家庭の養育力が弱いところは、登校日に来ず遊んでいたり、昼夜逆転になっていたりしていた。

教員が運動場で子どもたちと遊んでいて、地域からは「何で学童保育の子どもたちだけ運動場で元気に遊んで、そこに先生がいて、どうなっているんだ」と批判の声もあった。

3. リモート参加者、会場参加者から

●福祉への丸投げはなかったか

多くの学校の場合、「学校は勝手に休みになって、福祉に丸投げした」と評価する声も聞く。デイサービスなどに学校を使ってもらうのも多数派の経験じゃないと思う。一般の先生たちや公立学校の場合はどうか。

●授業を進めようというドライブ

（長い休校の影響を避けるため）授業を進めないというドライブがものすごくかかっている。特別支援学級が、通常学級（原学級）で日常が営まれているところがある。障害のある子どもも、通常学級の課題が出て、それができないことがストレスになる。「学校に来てからやるから大丈夫だよ」と先生が言ってくると、緩和されるが。一方で3カ月一度も外に出ていないとか、もともと精神科の課題を抱えていた人が命を絶ってしまうという事例と、学校が見ている課題の解離をどう考えるか。学校現場ではその課題をどう認識しているのか。

●オンライン授業の実態はさまざま

オンライン授業も、子どもたちに必要なものを届けようというスタンスと、何かともかくやれと言われたからという場合とがある。

●コミュニケーションをするな、という問題

子どもたちにとって今一番問題なのは、コミュニケーションをするな（しゃべるな、近づくな）と言われていること。本当ならば、先生や子どもたちとタッチしたり手をつないだりとか、触れ合いながらつながっていくことこそが、一番大事なときなのに、また学校はそれを支える場なのに、そこが切り離されている。

先生方がDVDを作られたり、預かり保育に先生が参加されておられたりとか、家庭訪問されたりとか、つながりを作っていく取り組みをされているが感銘を受けた。

4. 事後、鳥取支部での議論

以下の3点が課題として確認された。

- ① 学校教育の意義を確認する必要がある。
- ② 長期の休校が与えた影響の大きさを訴える必要性がある。
- ③ 感染者へのバッシング問題の検討が必要。

Ⅲ 第2回検討会

日時：2020年7月5日（日） 14:00-16:30

会場：鳥取大学地域学部 5160 教室をセンターに、Zoom によるリモート開催。

招待：古澤直子（東京都、公立特別支援学校教員、肢体不自由）、木澤愛子（滋賀県、公立特別支援学校教員、肢体不自由）、以上2名新規。他の招待：第1回と同じ。塚田直也（神奈川県、大学附属特別支援学校学部主事、知的障害）、西堂直子（兵庫県、大学附属特別支援学校副校長、知的障害）、高橋翔吾（大阪府、公立小学校特別支援学級担任、知的障害）、越野和之（奈良教育大学教員）。全員リモート参加。

参加者：鳥取支部委員に加え、寺川志奈子（鳥取大学教員）、内地留学教員、県内特別支援学校教員、全障研会員。一部リモート参加。

司会進行：國本。

1. 招待者の発言

●肢体不自由児を「学校で預かる」といいながら、実態は進まなかった

(肢体不自由児なので、)急に放課後デイで1日預かるという体制がとれないので、当初は学校に来るという形だった。スクールバス(以下SB)の運行はする。給食は出さない。弁当持参だった。あくまでも、学校は臨時休業で、保護者の就労など、特別な事情というのが条件だった。保護者は両親が就労している数が少なく、2割程度の利用だった。肢体不自由校はいつもインフルエンザなど、感染にはすごく気を配っている。専門への信頼がないと感じた教員もいた。卒業式、入学式については、肢体不自由校も影響が大きかった。校内ではあわてて荷物をまとめて持って帰らせるクラスもあった。

放課後デイが密であることと、学校が適切な環境であることから、4月から学校での「預かり」が行われたが、保護者対応は管理職が行い、利用を控えるようお願いしていた。放課後デイも閉所のところが多かったのだが、学校に来る子は1割ぐらいに減った。休校中なので、給食と言わず、昼食提供。でも、給食費はとった。

3月11日から一時預かりを開始している。しかし、条件は厳しくて、保護者送迎が絶対、SBは出さない、昼食は各自で弁当持参、というものだったので利用者はとても少なかった。

スクールバスが出ることになり、過密を避けるために保護者送迎をお願いし、弁当持参でも、利用者はかなり増えた。3月の家庭での過ごし方が厳しかったということが伺えた。

●病院に駆け込めない不安が、重症児家庭にはあった

近くの主治医である大学病院、ICUのある病院がことごとく満床で、外来を受け付けない状態。コロナに感染するより、今具合が悪くなったら運んでもらえる病院がないと保護者は怖がっていた。肢体不自由特別支援学校の子たちは、具合が悪くなるとICUやNICUに入る子が多い。主治医に電話で「本当に具合が悪くなったら連れていっていいか」と交渉した保護者もいた。受け入れるが、面会も付き添いも一切認めない中で、その子だけ預かると言われた。

●福祉事業所が支えてくれたが、学校を開けていた方がよかったのではないかな

重症心身障害児は、医療的ケア児を受けている事業所がすぐに対応し、丸1日受けてもらっていた。医療的ケアが必要で、ひとり親家庭で、どうしても働かなくてはならないという家庭が何軒もあった。事業所の所長が元訪問看護ステーションの所長だったので、地域の家庭の全部を知って支えてくれていた。

重症児クラスは、感染にすごく気を遣って生活している。自分の健康管理だとか、菌を持ち込まない、持ち出さないための手洗いとか着替えとかを徹底していた。今まで気を付けていたことをきっちりしていれば、学校でもよかったのではないかな。医療的ケアの事業所にも応援に行っているが、環境としては部屋の大きさも過密具合も、同じような状況なので、学校を開けていた方がよかったのではないかな。医療的ケア児を受け入れている事業所に担任を中心に交替で応援要請を受けて行った。ウイルスを持ち込まないように細心の注意をした。

●休校中にも「授業」「教材」の取り組みが行われた

新学期、教科書の郵送が行われた。校歌とか朝の会の歌とか、日ごろ歌っている音楽のCDを作って郵送した。知的代替と準ずる教育課程は学習プリント(線つなぎ、シール貼り、塗り絵など)を郵送した。その他にYoutubeの動画配信をし、教員紹介、読み聞かせ、手遊びパネルシアターなどを作った。

各家庭のインターネット環境を調査した。9割がた環境があるという返答だったが、携帯電話だったり、回線が限られていたり、という状況だった。保護者が在宅勤務で回線を使う、兄妹もいたりする。インターネット環境があればOKとは言えなかった。楽しいDVDを作って送った方が、子どもたちは好きに見える。保護者も、オンライン授業だと、肢体不自由の場合、親が全部準備しない限り、(インターネットに)つなげてイスに座らせ

てとকাশないといけない。

子どもたちのオンラインへの反応は思ったよりもよく、呼びかけに顔が動いたりした。保護者も「すごく喜んでいました」と言った。一方で、(画面越しだと)視線が合わない、読み聞かせも、機械音になり、視線が合わないなど、限界もあった。学校再開になり、直接の授業になると子どもの反応がよく分かった。

●体、健康状態への影響が大きい

(肢体不自由児の場合) 体への影響は大きい。尿路系感染を繰り返して、導尿が必要になった子もあった。学校が子どもの健康を支えているのだと感じた。昼夜逆転になって、入眠剤を使い始めた例もある。学校に来るために車いすに乗ったり、多様な姿勢をとること、こまめに水分をとったり、食事をとったりすること、いろいろな人に抱っこしてもらい、体をほぐし、気持ちもほぐすこと。リズムもでき、体が整うんだと感じた。

医療的ケアはないが、運動障害が重くて普通の福祉サービスは利用できないし、医療的ケアの事業所の範囲でもないと言って断られる、本当に行き場のない狭間の子もたちが心配だった。その辺の子どもたちはできるだけ学校に来てもらえるように連絡した。家庭でみるには保護者の負担が大きい。

●授業再開時の混乱

6月、1日おきに勉強の日があるという状態になり、1年生は暴れて泣いて授業にならないこともあった。分散登校は大人の都合だったのかもしれない。授業については制約がある。教員はマスク着用、歌、調理学習、子ども同士の接触はダメ。教室は子ども同士のソーシャルディスタンスを作るために、養生テープで子どもの人数のエリアを分けた。車いすの間隔が1mから1.5mぐらい開くように四角いマスを作った。すごい制約の中で授業。

管理職には、「これからは自己防衛の時代です。」と言われた。自分の行動で、例えば電車の何両目に乗って通勤しているのか、土日どこに行ったとか、誰と会ったとか、そういうことは感染したら全部聞かれるので、それを全部記しなさいと。

●バス増車、給食再開はあったけど

各学校にスクールバスが1台増車された。普通の観光バス。高等部の比較的落ち着いた人が対象になり、コース変更など、教員は多忙になった。給食も再開したが、調理工程、配膳数を減らした。どんぶり汁物だけとか、ラーメンと野菜炒めとか。エアコンをつけて、換気をしなさいと言われ、体温調節の苦手な子どもについては苦慮した。行事もぜんぶ中止だった。

●知的障害の子どもは体重増加もあった

知的障害クラスでは、休校期間中に3～7kg体重が増加した子が続出した。保護者は家で1日面倒見なくてはいいなくて、問題なく過ごしてもらおうと思ったら、好きなものを好きなだけ食べさせるというのはありがち。

IV 第3回検討会

日時：2020年8月30日(日) 13:30-16:30

会場：鳥取大学地域学部5160教室をセンターに、Zoomによるリモート開催。(第1回、第2回と同じ)

招待(第2回と同じ)：古澤直子(東京都、公立特別支援学校教員、肢体不自由)、木澤愛子(滋賀県、公立特別支援学校教員、肢体不自由)、塚田直也(神奈川県、大学附属特別支援学校学部主事、知的障害)、西堂直子(兵庫県、大学附属特別支援学校副校長、知的障害)、高橋翔吾(大阪府、公立小学校特別支援学級担任、知的障害)、越野和之(奈良教育大学教員)。全員リモート参加。

参加者：鳥取支部委員に加え、寺川志奈子（鳥取大学教員）、内地留学教員、県内特別支援学校教員、全障研会員。
一部リモート参加。
司会進行：國本。

1. 司会からの発言（別添レジュメ参照）

●休校の影響は大きかった

休校によって、特に放課後デイサービス（以下、放デイ）など、福祉への影響が問題だった。先生方が努力された地域もあるが、学校が十分対応しきれてなかった地域もあるのではないかな。感染拡大地域では医療がかなり圧迫されていた。要医療児、高齢家族が安心して病院に通えなかったり、通常の診療を避ける状況があった。

孤独感や孤立感から、職員集団が分断化された。職員室で会議ができなくて、職員会議は校内オンラインだった。

●「学びを止めるな」の意味

狭い意味での「学力保障」の動きが強い。通常教育では「学びを止めるな」、遅らせてはいけないという中、障害のある子どもでは全体的に置いてきぼりになっているんじゃないかな。

子どもたちが学校に集えない。学校に集ったとしても「ディスタンス」で、子どもたちや教師が触れ合ったり近づいたり話したりできない。コミュニケーションが大きく変化している。学校教育本来のあり方はどのようなものなのか、学校とはどういう存在だったのか、ということが問われていく状況になる。ICT 教育推進で、学校教育は必要ないじゃないかという極論まででてきている。

2. 招待者の発言

●全国一斉学校休校要請は誰が、どういう根拠で決めたのか

2月27日の全国一斉の休校要請。圧倒的多数の地域は首相の要請によって休校を余儀なくされた。萩生田文部科学大臣も、3週間以上にわたる休校要請は長期間で驚いているという対応だった。科学的根拠のない要請であり、全国の子どもたちや保護者や、あるいは学校の先生方や、さらには放課後デイサービスなど、深刻な影響を与えた。この責任は曖昧にしていけないものではない。

●「学校に見捨てられたような気がした」

学校は何もしてくれなかったとか、学校に見捨てられたような気がしたというコメントを保護者から聞く。（今回の調査では、学校の教師として何ができるかという努力があった。一方では、事実としては何もできなかったという地域もある。分かれ目は、学校で子どもを預かれないという時に、どこで生活して、どんな生活しているんだろうという思いがあるかどうか。それが学校教職員、先生方、管理職を含めての共通教養になっていない。

●重症児教育では、作業所の分野では

重症児教育の教師は、日ごろから感染予防など、配慮や努力や日常学校外での生活を含めていろいろな留意をしてきている。今回の休校は、子どもらしい生活をどう用意するかということで、作ってきた到達点に学ばないような対応だった。作業所の分野では、みんなが密になって論議をしながら、どういうふうに仲間を守り、職員を守り、法人や事業体を守るかということで、結局そういうふうになってきたと発言していた。そのことと、学校現場の対応の違いをどう捉えるかということでもあるかなと思う。

●「学びをとめるな」は、政策判断の誤りを「なかったことにしよう」としている

行政主導でやられている「学びをとめるな」は、政府の誤り（一斉休校）によって生じた子どもたちの生活の破

壊や制約を、大慌てでなかったことにしようとしている感じがしてならない。失われたものはそう簡単に戻らない。2～3か月にわたって学校教育を奪われ、あるいは友だちとのコミュニケーションを奪われ、さらにはマスコミから流されるコロナの不安の只中に置かれてきた子どもたちの、受けた負の影響に対して、本当の意味で取り戻すというか、やり直すというか、受けた傷に対するケアを含めてやっていくためには、独自の努力が必要。何が必要なのかという観点で考えないと、本当の意味で取り戻すことにならないんじゃないか。

●「主体的・対話的で深い学び」と、進行する現実

今年から「主体的・対話的で深い学び」のはずだが、今やられている授業はいったいそれになっているのかどうか。ソーシャルディスタンスとか、時間短縮して7時間にするとか、大急ぎで詰め込む。どれだけ彼らの言っていた主体的や対話的というものが、表層のキャッチフレーズにすぎなかったのかということをも端無くも暴露している。養護学校義務制以降、それ以前も含めて、障害が重い子どもたちに、きちんと学校教育を保障し、人間らしい発達を実現していこうじゃないかという努力の中で積み上げてきた、発達観とか、学校でこそつけるべき力とか、学校で子どもたちに保障したい生活の中身、生活の質が何だったかということ、今の「学びを止めるな」とかかわって、改めて強く意識しないといけな。

●知的障害の学校ではオンラインをやっていない

知的の学校ではオンライン授業をやっていない。機器を整備されたのは肢体不自由の学校だけだった。知的の学校ではオンライン設備がなく、放課後デイに行ったらいいという雰囲気になっている。教科書を郵送したとかいう話もない。肢体不自由校は「準ずる教育」の教育課程があり、学習空白を作ってはいけないという恩恵があったのかもしれない。

●家庭の困難が限界に

虐待ケースがあった。虐待ほどではなくても、子どもが夜寝ないとか癇癪を起す。父親が受け止めきれず大声を上げる・怒鳴ることで抑圧する。母親がそれに疲れてしまい、最終的に措置入院するというケースがあった。ショートステイや入院を止めますという病院や施設が多かった。

●実際に子どもに会うと分かること

オンラインでは分からない子どもの姿が、実際に会うと分かることがある。直接会って先生の言葉に「あー」とか先生を呼んだりとか、こんなに声出す子だったと分かる。学校に来ると、確かに授業中はすごく真面目だが、授業が終わった後はずっとニヤニヤしている。余韻に浸っていた（「楽しかったね」と言うとニヤニヤする）。

●教師の話し合いができない

本当に話し合いができない

●感染者が出ると

近隣で感染が増えたときにはすごくピリピリしていた。「学校は何もしてくれなかった。」といった声が上がって、教員の中ではショックを受けたり、保護者との関係がぎくしゃくしたり、若い先生がやる気をなくしてしまうようなこともあった。

所長さんを中心に、意識的に学校の先生が応援に行った時には保護者に「学校の先生が来てくれると表情が違うね。」や「すごく楽しそうだったよ。」と丁寧に伝えてくれた。

●学校：こんな楽しいところがあるんだよ

DVDは作って配った。学校のことを忘れないでほしいという気持ちからだった。あなたたちがつながる社会の一部として学校が、こんな楽しいところがあるんだよということを忘れないでほしいと考えて作って配った。

学校で何か先生たちが楽しいことをするという時に、誰かがふっと面白そうに見ると、みんなが一斉に見たり

とか、追いつかなくてもそっちの方が気になるとか、誰かが笑い出すとみんなが楽しくなるとか。その場の空気のながれのようなものができたりなど。

●先生や仲間と“いっしょに学ぶ”ことの価値

学びの保障、学びの個別化ということで ICT 環境を整えることがあがっているが、ICT では置き換えることのできない学びが学校にあること、先生や仲間と“いっしょに学ぶ”ことの価値の大きさを痛感した。

子どもは人を介してモノ（対象）とかかわる。モノとかかわりながら、大人を振り返ってみて、それを受け止め「そうだね」と言ってくれる人がいないと子どもの心に残る学びにならない。“いっしょに学ぶ”場において、自分もやってみたいという雰囲気や空気があって、自分の心が動いたことを、周りに受け止めてくれる人がいて、意味づけてくれることが重要。三項関係のなかでこそ子どもにとって価値のある学びが成立するのではないか。そうした学びを ICT で置き換えることができるとして、ICT の活用、個別化、家庭学習へとどんどん進むことに危機を感じる

●コロナバッシングと障害者問題

感染者の方が実名を出してブログで受けた被害を語られた。やはり出回っていた話は大半がデマだった。

障害者に対する差別と、コロナの問題での人権問題、バッシングというのは強い共通性を感じる。障害者施設ができる時、近所から反対運動が起きることがある。偏見と誤解に基づくものが。本来被害を受けている人を攻撃する。障害者問題にかかわる者として強く危機感をもっている。

背景にはトリアージの問題がある。命の選別の問題。バッシングしている側だけではなく、我々みんなが囚われている「排除の論理」「正義の名の下に」と書いてあるが、こうなれば大丈夫だとならない。ずっと不安だが、少しずつでも踏みとどまってくれる力をつけてくれているのではないかと、支え続けたいといけなのではないか。

●きょうされんメッセージ

きょうされんの声明の中に、仲間の人たちにも困ったことがないか、あればぜひ職員に相談してくださいというメッセージを出し、職員の人たちに対しても、仲間の生活を守ることと、自分の家族を守ることの間で板挟みになって大変な思いをしている人いませんかということが語りかけられていた。施設の責任者に対しても、施設の経営と職員と仲間を守ることとで孤立していませんか。もしそういうことがあればきょうされんの支部や役員、あるいは本部に、必ず相談に乗るから相談してくださいということが書いてあった。

3. 事後、鳥取支部での議論

●一斉休校の功罪を明らかにする必要がある

一斉休校の問題は、功罪をはっきりさせないといけない。

●学校のあり方が問われている

保護者と学校が共同で何かするという基礎がなくなりつつある。人間的なつながりを嫌う感じがある。少し前は、家庭に踏み込むことが好意的にとらえられた。今は非常識にとらえられる。

一斉の学校休校は、恐怖を植え付けられた。根拠のない中で恐怖感ばかりをかき立てられた。ウイルスに対する国民意識に恐怖を植え付けられた。

●障害者問題とバッシングの関連

・(今回の研究会で) 職場だけでなく仲間がいることがすごく大事と分かった。流されそうにもなるが、「間違っていないよ」「そんなことはやめなさい」と言われることは重要だと思った。